

「命の大切さ」

鯖江市中央中学校 1年 齋藤 楓我 (さいとう ふうが)

「思わぬ出来事はいきなり起こる。」

ある日、母のお腹にいた子どもが産まれました。ですが、産まれてしばらくたったころ、その子は死んでしまいました。僕はその時、まだ小学校三年生くらいで、「死」というものをなかなか理解できませんでした。ですが、その時の母や父が泣いている姿を見て、僕も「死」ということを理解しました。そのことに、戸惑い、冷静になることができるわけもなく、ただひたすら泣くことしかできませんでした。心では、「悲しい」、「この出来事は現実ではない」と信じたかったけれど、現実はそう甘くありませんでした。母の「どうしてこうなってしまったの。」という言葉がかすかに聞こえました。その言葉を聞くたびに、心がしめつけられるように痛かったです。

この出来事から、母は体調を崩すことが多くなったように感じました。僕は、母が体調を崩すたびに悲しくてつらかったけれど、母はもっともつとつらいんだなと思いました。だって、一生懸命お腹の中で何か月もかけて育てた赤ちゃんが、産まれてすぐに死んでしまったのですから。僕は、母のお腹が大きくなっていくのを外から見ていただけでした。母を見ていると、お腹を痛そうに抱えている日もありました。時には、嬉しそうにお腹をなでている姿も見ました。そんな母の姿を思い出すと、また心が痛くなります。

お葬式の日、火葬をし終わると、「ごめんね。ごめんね、生きさせてあげられなくてごめんね。」とつぶやく母。それを「お母さんのせいじゃないよ。」と慰める父。母もそう信じたかったと思います。でも責任感の強い母は、自分のことを自分で責めているように感じました。僕も、慰めてあげたいと思い、声をかけようと思いました。だけど、何と声をかければいいのか、変なことを言ってもっと母を悲しませたらどうしようという気持ちになり声をかけることができませんでした。でも、しばらく日がたってから、僕は、母には悲しいことより楽しいことを考えてほしいなど、ご飯の時などにたくさん話しました。話している時に、母が楽しそうに笑っていたりする顔を見ると、少し安心した気持ちになりました。僕は、悲しいことがあっても仲間と楽しくおしゃべりをしたりして笑顔になることが大切だなと思いました。悲しい出来事はたくさんあります。でも、ずっと悲しい顔をしていて、死んでしまった赤ちゃんは嬉しいはずがない。死んでしまった赤ちゃんの分もいっぱい笑って、長生きすることを大事にしようと、心に決めました。

人間は、時に、生きてくても生きられない生き物です。他の生き物も同じです。このことを知りながら人々は生きているのだと思います。いつ病気になってもおかしくないという人もいるでしょう。そういう人も、少しでも長く生きようと、毎日を一生懸命生きている。未来はどうなるのか分かりません。だから、未来のために生きることも大切かもしれないけれど、今を精一杯生きるのが大切なんだと、僕は思うのです。

この出来事を機に僕は、毎日元気よく、悲しくてもたくさん笑って長生きしようと思って生きています。日々変化する世の中に流されず、自分らしく、今を精一杯生きることを大事に、これからも生きていきます。